

2002年10月13日

盗んではならない・偽証してはならない

【聖書】 出エジプト記20章15～16節

盗んではならない。隣人に関して偽証してはならない。

エフェソの信徒への手紙4章24～28節

神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。悪魔にすきを与えてはなりません。盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。

【序】世界食糧デーを覚えて

1981年に国連で10月16日を「世界食糧デー」として守ろうと決められました。21世紀に人類が直面する最大の課題は「食糧」だから、世界から飢餓をなくすために、今から世界各国で協力して対策を立てていこうと考えたのでした。そして日本にもNGO「日本国際飢餓対策機構」がつけられました。それから21年たちました。21世紀が始まっています。

しかし世界の貧富の差は年毎に拡大し、貧困と飢餓で苦しむ人々の数は増えてきました。今一分間に28人・一日に4万人・一年間では1500万人が飢餓のために死んでいるそうです。そのうちの4人に3人は子どもです。この一年でシンガポールの人口の3倍近い数の子供たちが食べる物がなくて死んでいっているのです。

世界は全人口を十分に養う食糧を生産しているそうです。でも世界の人口の1/5の先進国が穀物の半分をとってしまい、食糧が公平に分配されていないことが飢餓の原因なのです。日本は農産物を世界で一番大量に輸入している輸入大国で、小麦580万トン・トモロコシ1620万トン・豚肉1200万頭分・牛肉190万頭分。これらを日本に供給している国々に、食べる物が十分手に入らず飢餓死にしている人が沢山いるのです。

しかも日本では、食べられるのに捨てられていく食品が一年間になんと13兆円にも達しているという統計もあります。恐ろしい話です。もしもこれだけのお金を貧しい国に返していけば、飢餓で死ぬ人はいなくなるのではないのでしょうか。

私たちは一昨年はS\$814.40を、昨年はS\$1520を献金しました。今年もお捧げいたしましょう。日本国際飢餓対策機構を通じて緊急援助と食糧確保のプロジェクトに用いられます。子どもニュースとラオスのプロジェクトの報告をお読みくださると、私たちの献金がどのように用いられるかお分かりいただけます。

【1】万引きしてしまう心

今日は先ず十戒の第八「盗んではならない」を学びます。これも「殺してはならない」と同じ

に当然過ぎるほど当然の戒めですね。でも盗みは世界中何処でも毎日沢山行なわれています。先日私の大先輩がブラジルのサンパウロで開かれた世界らい学会に出席し研究発表をしました。盗難に注意するようよく言われていたのに、到着そうそうの空港でバックのサイドポケットに入れておいた全てのものを盗まれて大変難儀をしたそうです。80才を過ぎて尚ブラジルまで出かけて学会発表をなさるなど、実に羨ましい限りですが、でもドロボウの餌食になってしまいました。こわい世の中です。

旧約聖書の箴言にアグルの祈りが記されています。「貧しくもせず、金持ちにもせず、わたしのために定められたパンで、わたしを養ってください。飽き足りれば裏切り、主など何者かと言うおそれがあります。貧しければ盗みを働き、わたしの神の御名を汚しかねません」(30:8~9)。そうですね。豊かになればお金で何でも思い通りになって、神さまを依り頼む謙虚さが失われます。また空腹でひもじければ盗んで腹を満たそうとすでしょう。この祈りはとても大切だと思います。

しかし盗みの動機は貧しさだけでしょうか。豊かな国でも絶えない「万引き」。これはどう考えたらよいのでしょうか。札幌時代の話ですが、子どもの小学校のPTAの役員を長く務めました。ある時学校近辺の商店から子供たちの万引きについての悩みが訴えられました。万引きした子どもを注意したら逆に親から恨まれ、店の悪口を言い広められ困ってしまったのでした。別にお金に困ってはいないのについポケットに入れてくすねてしまいます。盗みと言われるほどのことではないと思うからなのでしょう。

そこで私は卒業式の時に祝辞の中でこう語りました。「心の中でこんなささやきの声を聞いたことはありませんか。〈誰も見ていないよ〉〈みんなもやっているよ〉〈一回だけだよ〉 私にとってこの三つの声のうち一番こわいのは〈誰も見ていないよ〉です。みなさんはどうですか。でも神さまはちゃんと見ていらっしゃいます。神さまを恐れて、間違っていると思うことはやらないという決心を、いつも心の中に大事に持って人生を進んでいってください」。

箴言には「盗んだ水は甘く 隠れて食べるパンはうまいものだ。そこに死霊がいることを知る者はない。彼女に招かれた者は深い陰府に落ちる」(9:17~18)とあります。これは姦淫の罪を指していると言われますが、姦淫だけではなく、言葉どおりの意味でも通用すると思います。

[2]ガンジス河のほとりで

では新約聖書ではどう教えているのでしょうか。「盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい」(エフェソ4:28)。

エフェソの信者たちの中には、盗みを働いていた人たちも居たのです。そんな人でも教会家族の一人として迎えて一緒に教会生活を送っているとは、良い教会ですね。「あの人は以前、こんなことをした人だったのだよ」などといつまでも持ち出されてはやり切れません。「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新し

いものが生じた」(第1コリント 5:17)。そうです。だれでもイエス・キリストを信じるならば、全く新しい人間になれるのです。ではイエス・キリストを救い主として信じた者の心には、どのような新しい心が生じるのでしょうか。

「盗みをしないですむように、せめて自分の食べる位は自分で稼ぎなさい」。これが世の中の常識でしょう。でもパウロは言います。「まっとうな仕事に汗水流して収入を得て、自分よりも困っている人々に分け与えるようになろう」。自分が食うために働くことは勿論ですが、それに留まらず、困っている人を助けることが出来るから働こうというのです。

使徒言行録 20 章には、エフェソ教会の長老たちに語ったパウロのお別れの説教があります。「ご存じのとおり、わたしはこの手で、私自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました」(20:34～35)。

イエス・キリストはご自分の命を与えてくださいました。それによって滅びるはずの私たちは新しい命をいただいて生きる者になりました。キリストは与える幸せ・与える喜びをもたらす神さまの愛を私たちに下さったのです。だからパウロもエフェソ教会でその喜びに生きる自分の姿をみんなに証したのです。

「盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい」。困っている人々に分け与えるようには何という素晴らしい言葉でしょうか。一年に 1500 万人の人々が飢え死にしている世界の現実が私たちに訴えていることは、まさに分け合う心を強く持とうということではないでしょうか。

今年の 1 月成人の日の頃に新聞に載った曾野綾子の文があります。「去年インドのガンジス河に面したバラナシに行った時、そこでインド風の宿屋に長逗留をしている日本人の若者たちに会った。そこは 1 泊 100 円ぐらいで泊まれるので、中には 4 年間も暮らしている人がいた。彼らは 1 日中何もしない。テラスに座って河を眺め、楽器をいじり、世界中からやって来る若者たちと喋ったり、ただぼんやりしたりしている。誰もが自分でアルバイトをしてお金を貯めて来たと言う。一応の独立心もあるのだ。

同行したインド人の神父にこの若者たちの印象を聞くと、誰もが幸福そうには見えなかったと言う。彼らは皆、自由・経済力・健康・知能・すべてを持っているのに、である。どうしてそう感じたのかと聞くと、明快な答えが返ってきた。「彼らは自分がしたいことをしているだけで、人としてすべきことをしていないからだ」

したいことだけしようとするのは、幼児性の表れである。大人だって本当はしたいことだけしていたいのだが、そうはいかない。やはりすべきことをしなければと思う。そしてしたくないこともした時、初めて人は、自分が必要とされている存在であることを感じ、現世に生きている意

義を見つけて、不思議なことに心が満たされるのである。

人は受けている時には、一瞬は満足するが、次の瞬間にはもう不満が残る。もっと多く、もっといいものをもらうことを期待するからだ。しかし自分が人に与える側に立つ時、ほんの少しでも楽しくなる。相手が喜び、感謝し幸福になれば、それでこちらは更に満たされる。

若者たちにいささかの苦勞をさせて、庇護されるか自分のことだけをするのではなく、他人を庇護し愛を与える立場に立たせることだ。それが活力と存在感のある大人になる唯一の方法なのである」インドまで来て、飢えて死んでいく人々が目に入らず、ガンジス河だけをぼんやり眺めて日を過している若者たち。まさに私たち日本の姿そのものを表わしているような気がします。

[3]ストーブ熱い・熱い

第九の戒めは「隣人に関して偽証してはならない」です。単に嘘をついてはいけないと言われているわけではありません。裁判で嘘の証言をしてはならないと戒められているのです。これはどういうことでしょうか。

十戒が与えられる前に、モーセはイスラエルの民の指導者としてとても大切なことをしました。それは裁判のシステムを整えたことです。これは妻の父親であるエテロの助言によりました。民衆を 1000 人・100 人・50 人・10 人の単位にまとめて、神を畏れる有能な人で、不正な利得を憎み、信頼に値する人物をそれぞれの長にして、民衆の間に起こる争い事を規模に応じて処理させる。そして大きな事件があった時だけモーセが裁くことにしたのです。

大勢の人間が共同体を作って暮らしていると、日常生活の中で利害がぶつかって争いが起こります。それをきちんと裁いて解決していくことがとても大切です。そこで法律を決める国会(立法)と、その法律に従って行政を行なう政府と、正しい裁判によって秩序を守る司法の三つの権威が互いに侵害されずに確立していることが、良い国家の条件だといわれています。エテロの助言で裁判のシステムが整えられたことは、イスラエルが単なる民衆の集まりから、一つの共同体に変わっていく大事な一歩だったのです。

さて正しい裁判には先ず正しい裁判官が必要です。モーセはエテロの助言に従って「神を畏れる有能な人で、不正な利得を憎み、信頼に値する人物」を選びました(出エジプト記 8:21)。次に正しい証言です。お互いの言い分が食い違うので争いになったのですから、どちらの言い分が正しいのかは、真実を明らかにする証人の証言にかかってきます。もしも証言が間違っていたら、真実が明らかにされないばかりか、不義・不正が行なわれてしまいます。これは本当に恐ろしいことです。そこで「隣人に関して偽証してはならない」と神さまはお命じになったのです。

ところが権力を握る者は偽証をする証人を立てて自分の利益を守ろうとします。サマリアの王アハブと妻イゼベルの罪が詳しく記されています(列王記上 21 章)。アハブ王は宮殿の隣のぶどう畑を自分の菜園にしたいと思い、持ち主のナボトによい値段を出すから譲ってくれと

頼みました。しかし「先祖代々の土地だからいくら王様でも譲れません」と断られてしまいました。すると妻のイゼベルが町の長老・貴族に王の名前で手紙を書き送りました。「ナボトを裁判にかけ、ならず者二人に彼は神と王を呪ったと証言させよ」。ナボトは石打ちの刑で殺され、持ち主のなくなったぶどう畑は王のものになりました。すると神の怒りが下り、王国にクーデターが起こり、イゼベルは城の窓から突き落とされて馬に踏みつけられ、体は野犬に食われてしまいました(列王記下9:33~37)。

イエス・キリストが十字架に架けられた時にも、議会は偽証人を何人も雇いました(マルコ14:55~57)。ローマ総督ピラトは「彼に何の罪も見出せない」と三度も拒みましたが、指導者たちは民衆を煽動して「十字架につけろ」と騒ぎ立てて、暴動を起こしかねない状況をつくり、裁判をねじ曲げてしまいました(ヨハネ18:38~19:16)。

パウロはエフェソの教会にとってもユニークな言葉を書き送っています。「神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです」(4:24~25)。なぜ真実を語らなければならないか。それはお互いに一つの体を作っている部分だからだということです。

私たちが東京の教会から雪にすっぽり埋まっている札幌に赴任した時、長男は4才直前、長女は1年4ヶ月でした。石炭ストーブをたいて家の中を暖めます。そこで私たちは先ず、燃えさかるストーブのそばに子供たちの顔を近づけて、「熱いぞ、熱いぞ」と教えました。よちよち歩きの長女は「アチー・アチー」と言ってストーブに近づこうとはしなくなりました。

熱いとか痛いという感覚が正しく脳に伝えられ、体が正しい反応をするように指令が出されなければ、私たちの命は守られません。真実を語るとは、まさにそういうことなんだとパウロは教えています。私たちは真実を語ることで自分の命が脅かされるのはご免をこうむると思います。しかしそれは違う。真実を語ることで隣人が守られるだけでなく、自分の命も守られるのだと言われています。優れた言葉ですね。私たちはこの事をよくよく心に留めておきたいものです。

[結]美しい村づくり

先程、万引き事件の後に私が小学校の卒業式でお話をしたと申しましたが、あれは子どもたちには余り評判が良くなかったようです。在校生代表で式に参列していた5年生たちが教室に帰ってから、私の娘が居るのを意識してでしょう。「神さまが見てるからだってさ」「神さまを恐れてだってさ」と口々にはやし立てたそうです。そこで娘は帰宅してから私に強く申し入れました。「パパ、来年はお話しないで頂戴。私の卒業式なんだから」。

第三の戒め「神の名をみだりに唱えない」の時にご紹介しましたが、総理大臣まで逮捕されたロッキード事件の時、丸紅の社長が国会で天地神明に誓って嘘はついていませんといながら、堂々と嘘の証言をしました。その嘘はアメリカ議会でのロッキード社会長の証言に基づくアメリカ側の調査で暴かれ、彼は有罪・実刑判決を受けました。しかし体をはって会社

の利益を守ろうとしたとして、社内では高く評価されていました。

残念なことです。日本の社会は、政治家も官僚トップの次官でも、自分や身内を守るために、証言で真実を明らかにしようとはしません。教室に帰ってきて「神さまを恐れてだっさ」と叫んだ5年生。きっと私の話が耳に痛かったのでしょう。でもこの子供たちがそのまま大きくなっていくと、こういう大人になっていくのです。神さまを恐れる心を、教会がもっともっと大きく叫んでいかなければなりません。

今日皆さんにお配りした世界食糧デーの子どもニュース「南の国の小さな村」をご覧ください。この貧しい村を3人の旅人が通りかかります。「お腹が空いています。助けてください」と村人が訴えました。「こんなに貧しくてはどうしようもない」と言って2人は去って行きました。でも3人目の旅人は自分の鍬と種を差し出して「あなたたち自身で村を変えることができます」と言いました。「この村はとても美しい村です」という言葉に励まされて、人々はやがて希望をいだくようになりました。そして二つ向こうの山から水を引いてきて、とうもろこし畑をつくりました。それから隣の村にも手伝いに行き、一緒にとうもろこし畑をつくりました。

自分たちの手で村を変えていく働きの実際のレポートが、もう一枚のプリントです。どうぞお読み下さい。飢えのただ中にある人々が、あきらめないで助け合い、飢えをなくしていこうとすることこそ、本当の解決策です。まさにその働きを国際飢餓対策機構が進めています。

「困っている人に分け与えるようになるために、労苦して自分の手で働く」。なんと素晴らしい言葉でしょう。「盗みを働いていた者」への呼びかけです。私たちは飢えて死んでいく人たちの国から、食糧を集めて満腹しています。食べられる物を無駄に捨てています。「盗みを働いている者よ」と言われても、当たっているのではないのでしょうか。

労苦して働いて、分け与える者になっていこうではありませんか。美しい村づくりに参加いたしましょう。